

史跡 平出遺跡

昭和61年度県営かんがい排水事業中信平地区
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1987

塩尻市教育委員会



序

平出遺跡は昭和22年から27年にかけて大規模な発掘調査が行われ、縄文時代から平安時代にかけての幾多の貴重な資料が発見され、昭和27年3月には国の史跡に指定された重要遺跡であります。この度この史跡地区を含む桔梗ヶ原地区を対象として県管かんがい排水事業が計画され、史跡への影響も重大であることから県教育委員会、文化庁の指導のもとに事業実施地区の事前発掘調査を行うことになりました。発掘調査は花村格先生を団長にお願ひし、12月5日から12月12日にかけて行われました。この間団長はじめ参加者の方々には初冬の寒さの中で献身的な御尽力を賜りました。また、今回の調査が初期の目的を達し、無事終了できましたことは県営畑地帯総合土地改良事業桔梗ヶ原地区実行委員会の平林実己実行委員長以下役員の方々、平出区長市川得二氏および平出遺跡会長市川琢磨氏等地権者の方々の深い御理解と御援助によるものであります。ここに衷心より敬意と感謝をささげる次第であります。

昭和62年3月

塩尻市教育委員会

教育長 小松 優 一

— 例 言 —

- 1 本書は塩尻市教育委員会が長野県松本地方事務所より委託を受けた昭和61年度県管かんがい排水事業中信平地区に伴う史跡平出遺跡発掘調査報告書である。
- 2 調査は、平出遺跡発掘調査団（団長 花村格）に委託し、現場での調査は昭和61年12月5日から12月12日まで実施した。
- 3 遺物および記録文の整理作業、報告書作製は平出遺跡考古博物館において昭和62年12月から昭和62年3月まで行った。
- 4 出土品・諸記録は平出遺跡考古博物館で保管している。

目 次

第I章 調査経過	1
第1節 調査にいたる経過	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査日誌	3
第4節 遺跡の状況と面積	3
第II章 調査結果	5
第1節 発掘調査場所	5
第2節 調査概要	6
第3節 遺構と遺物	10
(1) H-114号住居址、(2) H-115号住居址、(3) H-116号住居址、	
(4) H-117号住居址、(5) H-118号住居址、(6) 溝状遺構	
第III章 ま と め	16

第I章 調査経過

第1節 調査にいたる経過

昭和38年から開始された県営かんがい排水事業は、順次工事が進められ昭和47年からは塩尻市地域がその対象区となり、さらに桔梗ヶ原地区も昭和60年に事業認定され、具体的な工事が進められることとなった。この事業地域内に、国史跡平出遺跡が含まれていたことから塩尻市教育委員会は事業主体の長野県松本地方事務所と再三にわたり協議を重ね、遺跡への影響を最小限にとどめるように当初計画の手直しを行った。これに基づき昭和60年7月29日、長野県教育委員会を通じて、現状変更許可申請書を文化庁に提出した。11月2日文化庁「史跡平出遺跡よりの現状変更（かんがい施設布設）について」の通知があり、「申請地は地下遺構の存在が予測される場所です。事前に発掘調査を行い、その結果を待って処理することが適当であると考えます。」と事前に発掘調査を行いその結果を待って処理する旨の通知があった。

このため、塩尻市教育委員会は長野県松本地方事務所と協議し、昭和60年、61年の2ヶ年度に事前発掘調査を実施することとし、昭和60年度はかんがい排水事業部分延349mの調査を行った。昭和61年度は残りの延146mの調査を実施し、かんがい排水事業部分の発掘調査を終了した。

発掘調査計画書（一部記載）

1. 発掘調査地 塩尻市大字宗賀平出
2. 遺跡名 平出遺跡
3. 発掘調査の目的及び概要 開発事業県営かんがい排水事業（乾水部）に先立ち360㎡を発掘調査して記録保存をはかる。遺跡における発掘作業は昭和61年11月30日までに終了する。調査報告書は昭和62年3月25日までに刊行するものとする。
4. 調査の作業日数 発掘作業15日 整理作業7日 合計21日
5. 調査に要する費用 1,500,000円
7. 調査報告書作製部数 300部

第2節 調査体制

団 長	花村 格		
担 当 者	小林 康男		
調 査 員	鳥羽 嘉彦		
	伊東 直登		
調査補助員	龍野 守		
参 加 者	赤須陽子、赤津道了、足立幸子、内川幸治郎、太田 和、大野田力雄、小沢甲了郎、加納寛子、川上菊子、北沢喜子雄、小松礼子、清水年男、高橋タケ子、高橋烏徳、高橋阿や子、手塚きくへ、寺沢俊子、長瀬静雄、保高愛子、山口仲司、山下 広、赤城圭一、浅井 清、稲葉敏夫、碓井市郎、太田多美子、葛西一義、上條留次、熊谷玄四郎、倉科圭吾、郷戸正次、進藤真一郎、野沢孝雄、古畑明一、星野 昭、堀内ふさ子、宮下 進、山上はるみ		
事 務 局	塩尻市教育長	小松 優一	
	市教委総合文化センター所長	二木 三郎	
	〃 文化教委担当課長	清水 良次	
	〃 文化教委担当次長	原田 博	
	〃 文化教委担当副主幹	小林 康男	
	〃 文化教委担当主事	伊東 直登	
	〃 文化教委担当主事	鳥羽 嘉彦	
協 力 者	県営畑地帯総合土地改良事業桔梗ヶ原地区実行委員会委員長	平林 実巳	
	〃	副委員長・工区長	市川 得二
	〃	工区長・畑かん部会長	川上 徳治
	〃	工区長・農道部会長	中野 弘樹
	〃	工区長・用地補償部会長	平林 金男
	〃	畑かん部会副部会長	平林 達郎
	〃	農道部会副部会長	遠原 勝仁
	〃	用地補償部会副部会長	川上 豊
	〃	畑かん部員	大野田恒治
	〃	〃	市川 信利
	〃	〃	川上 金吾
	〃	農道部会員	平林 秀一
	〃	〃	大野田四郎
	〃	〃	平林 正雄
	〃	用地補償部員	遠原 良美

県営畑地帯総合土地改良事業桔梗ヶ原地区実行委員会

用地補償部員

平林 一夫

”

”

上野 広市

地権者 川上 金吾

川上美代次

第3節 調査日誌

12月5日(金) 晴 トレンチ設定。1～10区掘り下げ開始。

12月6日(土) 晴 3、4区より溝状遺構検出。8区(H-114)、15区(H-115)、19区(H-116)、23区(H-117、118)検出。

12月7日(日) 定休日

12月8日(月) 晴 H-117掘り下げ。25～29区掘り上がり。出土遺物なし。セクション図作成。

12月9日(火) 晴 溝状遺構精査。写真、平面図、セクション。H-117を東に拡張。25～29区埋めもどし。H-116拡張。

12月10日(水) 晴 H-116、117拡張部分掘り下げ。H-114、115精査。平面図、写真撮影。

12月11日(木) 晴 H-116、117精査、平面図、写真撮影。H-117はH-118と重複していることを確認。1～24区埋めもどしを開始。

12月12日(金) 晴 H-117、118精査、平面図、写真撮影。1～24区埋めもどし完了。

整理作業は12月～3月、平出遺跡考古博物館において実施された。出土遺物の洗浄、注記、復元作業、実測図作成、作成図面の整理、製図、図版作成を行う。報告書の原稿執筆も併行して実施する。

第4節 遺跡の状況と面積

遺跡名	場 所	現 況	種 類	最低調査 予定面積	調査面積	発掘経費
平 出	塩尻市大字 宗賀平出	道 路 水田・畑	集落址	360 m ²	361 m ²	1,500,000円

発掘調査経過表

内容	月	工 程 表			検 出 遺 構	主 な 出 土 遺 物
		11	12	1~3		
発 掘 期		<div style="border: 1px solid black; width: 100px; height: 20px; margin: 0 auto;"></div>			古墳時代 住居5軒 溝状遺構2ヶ所	土 師 器
工 期		着手	昭和61年12月5日	完了		

第II章 調査結果

第1節 発掘調査場所

平出遺跡は、塩尻市大字宗賀平出に所在する(第1図)。松本平の最南端に位置し、奈良井川の扇状地上に占地する。遺跡は南に存する比叡ノ山東麓の平出の泉から流出する洪川に沿って東西に帯状に展開している。遺跡は昭和27年国史跡として15haが指定され、保護がはかられている。

今回の調査区域は昨年度発掘調査を実施した残りの部分で東部地域に属し、洪川に臨んで南面する微傾斜地である。標高は726~727mである。

今回の調査地周辺は、昭和54年度遺構確認調査、昭和20年代でのJ、K、L、M各トレンチ、そして本年度同時に調査を実施した5トレンチがそれぞれ入れられている。これらの調査結果を総合的に検討することによって、遺跡の東部地区の実態がある程度把握できるものと思われる。



第1図 平出遺跡位置図

(1:50,000)

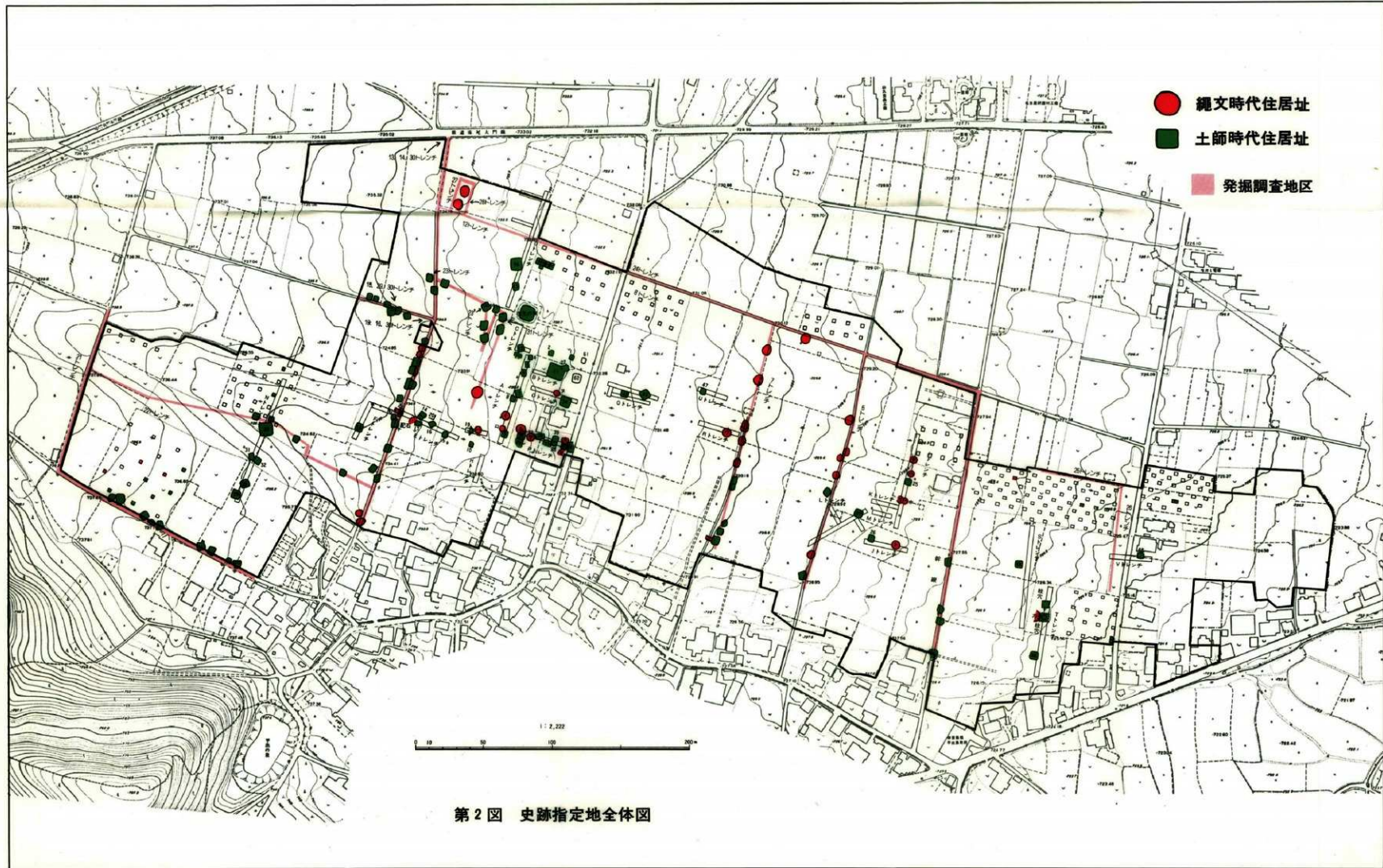
第2節 調査概要

今回の発掘調査は、昨年度その一部分を調査した奥宮かんがい排水事業幹線部設備所の残りの地区延長146m、361m²にわたって実施された。調査区域は、今年度調査区域の最北端を1区(1区画5m)とし、これより南に向かって31区まで設定した。

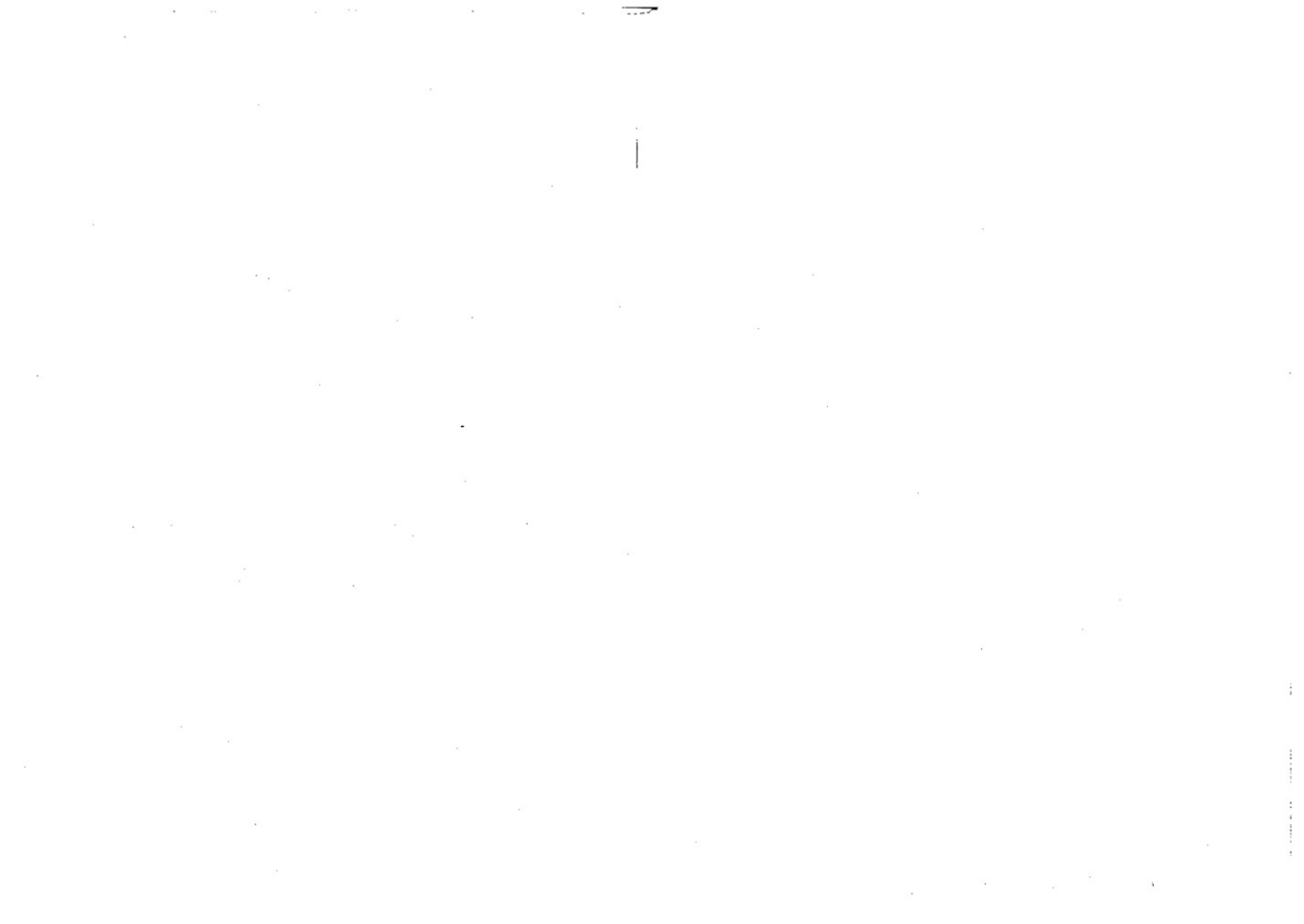
調査によって検出された遺構は、古墳時代の住居址(H-114、115、116、117、118)の5軒、溝状遺構2ヶ所である。出土遺物は、住居址覆土を中心として土師器がまとめて出土した以外には、凹石、打製石斧が得られたにすぎない。

以下、各区における調査結果の概要を記す。

- 1区 I層表土(耕作土で暗褐色土)24~42cm、II層黄褐色9~20cm、III層ローム層の層序で堆積し、部分的にブドウ棚による攪乱がローム面にまで達している。遺物の出土はない。
- 2区 I層30~40cm、II層9~22cmでロームに達する。攪乱が部分的に入る。遺物はない。
- 3区 I層27~44cm、II層10~15cmで、遺物の出土はない。溝状遺構が検出されている。
- 4区 ロームまで37~46cmと比較的浅い。層位は安定している。遺物はない。
- 5区 溝状遺構が検出された。II層は薄く、部分によっては欠除している所もある。遺物の出土はない。
- 6区 I層48~58cmと厚く、II層は4~9cmと薄いが攪乱もなく層位は良好。凹石が1ヶ出土している。
- 7区 I、II層とも6区と同様の堆積状態を示し、安定した在り方である。打製石斧1出土。
- 8、9区 H-114号住居址検出。少量の土師器が住居址覆土中から出土した以外、遺物の出土はない。ブドウ棚により住居の1部も攪乱を受けている。
- 10区 I層31~40cm、II層13~24cmで、ブドウの根による攪乱が1部に見られる。遺物の出土はない。
- 11~13区 ロームまでは56~62cmと比較的深く、安定した状態。遺物なし。
- 14、15区 H-115が検出される。
- 16区 攪乱著しく、ローム面まで及んでいる。遺物なし。
- 17区 安定した在り方を示している。遺物なし。
- 18、19区 ローム上までの攪乱が著しい。H-116が検出されているが、攪乱のため不明瞭な部分も見られる。住居址覆土から僅かな遺物出土。
- 20区 比較的安定した在り方を示す。遺物なし。
- 21区 ローム面上に焼土の散布が認められたが、遺構に結びつくものか否かはっきりしない。
- 22、23区 22区でH-117、23区でH-117を切る形でH-118が検出された。攪乱もなく遺存状態のよい住居址である。焼土家屋の様相を呈し、遺物も床面に接するようにして出土した。住居址床面までは地表から101cmを測る。
- 24~31区 この8区間は、地形が南に向かって緩やかに南面する傾斜地となっている。そのため

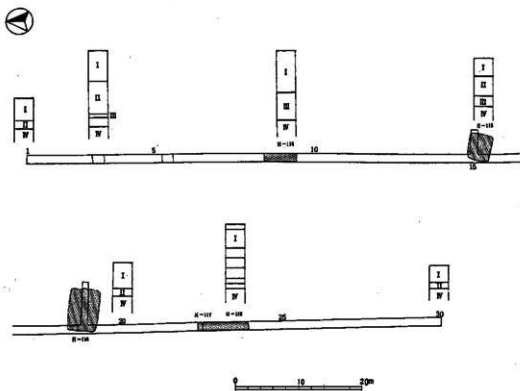


第2図 史跡指定地全体図



地表からローム面までは22~42cmを浅くなっている。遺物の出土はまったくない。

以上のように、今回の調査では8~23区の区域に住居址が集中して発見されたが、住居以外には遺物の出土は殆んどみられないという結果となった。



第3図 発掘調査区全体図

第3節 遺構と遺物

(1) H-114号住居址

8、9区にかけて検出をしたが、ブドウ、ブドウ樹支柱のため未掘の部分があり規模等詳細を明らかにし得なかった(第4図)。

検出されたのは北壁と床の一部のみである。北壁は、壁高53cm、掘り込みは傾斜を示して立ち上がっている。床は平坦で、極めて堅い。

本址床面は地表下108cmの深さにある。

本址の出土遺物は大変少なく、土師器の内面に黒色処理が施されている坏などが出土しているが、図示できるものはなかった。

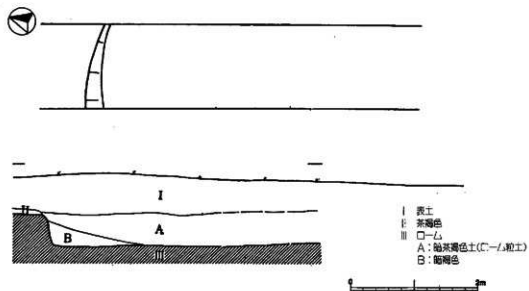
(2) H-115号住居址

14、15区から検出され、規模確認のため東側に拡張区を施ける(第5図)。

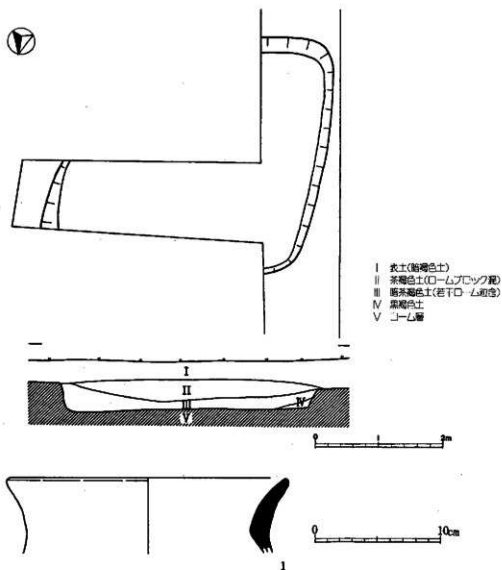
南、西、東壁が確認できたため、おおよそのプラン、規模を把握することができた。東西385、南北390cmのやや不整の隅丸方形を呈する。東壁は、壁高25cm、西壁は32cm、南壁23cmで、ともに傾斜をもった立ち上がりとなっている。肩溝はない。床は水平で、良く踏み固められ遺存状態は良い。

本址の床面は、地表面から76cmである。

本址の出土遺物は大変少なく、土師器の甕(1)の口縁部が図示できるのみである。口径は22.0cm



第4図 H-114号住居址

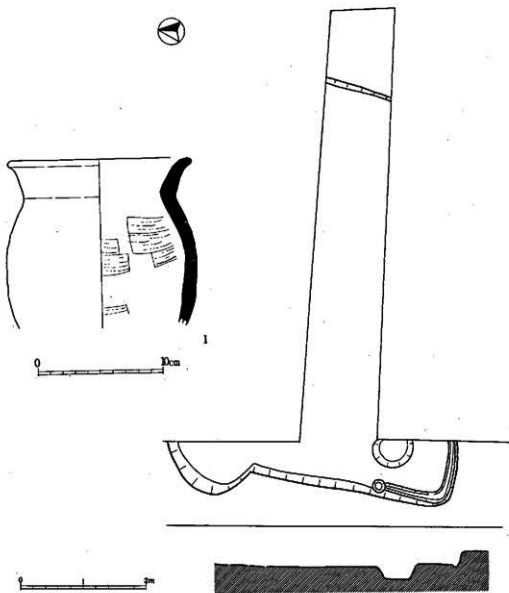


第5図 H-115号住居址

を計る。横ナデによって整形されている。

(3) H-116号住居址

18、19区から検出され、規模、プラン確認のため東側に拡張区を設ける(第6図)。調査の結果、東、南、西壁が確認でき、ほぼ規模、プランを推定することができた。東西635cm、南北も同規模の隅丸方形と考えられる。東壁は、壁高35cmあるが、掘乱が入り込んでいるためグラグラとした傾斜をもった立ち上がりとなっている。南壁は、壁高29cmで、垂直の掘り込みである。西壁は、北面部分に掘乱が及んでいるため不明瞭であるが、南側部分は壁高36cmでほぼ垂直に掘り込

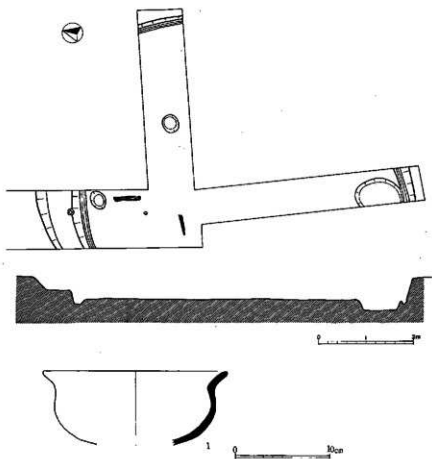


第6区 H-116号住居址

まれている。南、内壁のコーナー部分には周溝がめぐり、幅11~19cm、深さ5cmの規模である。床は平坦で堅いが、攪乱による小穴が数多く穿れていて遺存状態は良くない。周溝の北端と南西隅にビットがある。P1は、22×20、P2は径65cm、深さ33cmである。調査範囲からは、カマドは発見されなかった。

地表から床面までの深さは47cmで、覆土は床直上まで攪乱層となっている。

本址の出土遺物は大変少なく、土師器の壺(1)1点のみである。口径は14.0cmを計る。内面にへ



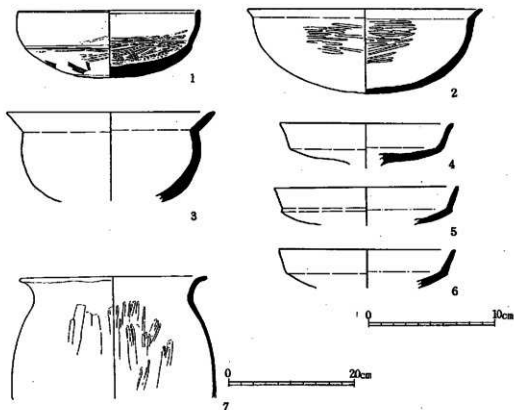
第7図 H-117、118号住居址

ラナデ痕が確認できた。図示できなかつたが土師器の坏、甕の破片が出上している。

(4) H-117号住居址

22区から検出され、大半をH-118号によって切られている。わずかに北壁の一部と床を確認したにとどまる。壁高は29cm、やや外傾した立ち上がりを示している。床は平坦でよく踏み固められ堅緻である。厨溝はない。

本址の出土遺物は大変少なく、土師器の坏(1)が図示できたのみである。坏(1)は口径19.6cmを計



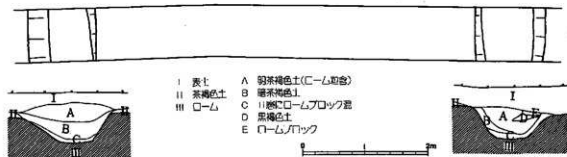
第8図 H-118号住居址出土土器

出土 地点	定 番号	種 別	器 種	口径 (cm)			色 調		焼 成	成形調整方法		備 考
				口 径	底 径	口 縁	内	外		外 面	内 面	
H-118	1	土坪	坪	14.0	—	5.8	暗褐色	赤茶褐色	良好	ヘラミガキ、ヘケメ	ヘラミガキ	
	2	×	×	16.2	—	6.7	×	茶褐色	×	ヘラミガキ	×	
	3	×	×	16.4	—	—	青褐色	赤褐色	普通			
	4	×	高坪	13.6	—	—	褐色	×	×			
	5	×	×	14.4	—	—	明褐色	明褐色	×			
	6	×	×	13.8	—	—	褐色	×	×			
	7	×	壺	30.0	—	—	黒色	黒色	良好	ヘラナデ	ヘラミガキ	

る。内外面とも磨耗が激しく調整方法は明確ではない。この他に凶示できなかつたが、土師器の甕、土銚の破片および須恵器の大型甕と思われる破片が出土している。大型甕はロクロナデによって調整されており、櫛描波状文、波線が旋文されている。6世紀前半に属すると思われる。

(5) H-118号住居址

22、23区から検出され、北側をH 117と重複している。東、南、北壁を確認できたため、およびその規模、プランは推定できる。南北704cm、東西も同規模と推定される方形ないし隅丸方形プランを呈する。南壁は、壁高50、東壁42、北壁20cmで、ともにほぼ垂直のきれいな張り込みであ



第9図 溝状遺構

る。南壁下には、幅11、深さ7、東壁下には幅9、深さ5、北壁下には幅12、深さ10cmの周溝がめぐっている。床は平坦で、よく踏み固められ非常に堅緻で、良好に遺存している。床直上には、焼土、炭化材が散乱し、特に北壁沿いに顕著に認められる。ピットは、3穴あり、他に北壁に小孔が穿れている。P1は、深さ17、P2は24cmで柱穴の可能性もある。P3は南壁下にあり、南北100cm、深さ15cmの規模をもつ。地表下101cmに床を構築している。

本社の出土遺物は北壁側の床面直上に集中しており、土師器の坏3点、高坏3点、甕1点が図示できた。坏は直立的で少々内湾している口縁をもつ(1)と「く」の字に外反し、頸部内外面に稜をもつ(2)(3)の2形態に分けられる。(1)は頸部に稜線をもち、須恵器の坏をまねた形態をもつ。調整方法はいずれもヘラミガキである。高坏は口径が10cm前後と均一的である。(5)は坏部の稜がやや突出している。甕(7)は口径30.0cmを計る大型のものである。口縁は「く」の字に外反し、胴部のふくらみは小さく、直線的である。外面はヘラナデ、内面はヘラミガキによって整形されている。

本社の所属時期は出土遺物より6世紀末から7世紀初に比定される。

(6) 溝状遺構

3区に1ヶ所、4区に1ヶ所発見された。両者は598cmの間隔をもっている。ともに東西方向に延びているものと思われる。3区発見のものは、上幅108cm、最深部57cmである。覆土は、明茶褐色、暗茶褐色、ロームブロック混入の茶褐色土が自然堆積しており、人為的に埋めもどされたものではないことを示している。掘り込みは、南壁はグラグラとした傾斜をもったものとなっている。U字状のきれいな掘り込みである。4区発見のものは、上幅112cm、深さ53cmで、覆土は3区のものとはやや異なるが、やはり自然堆積を示している。掘り込みは、北壁が急傾斜をなし、南壁はグラグラとした傾斜を示している。3区同様きれいなU字状を呈している。方形周溝墓の溝かとも思われるが調査区の制約のため明確にすることができなかった。もし方形周溝墓とすれば、内側に面する壁が急傾斜をなし、外側はグラグラとした傾斜をもつ溝となっていたことになる。

3区の溝底は地表下115cm、4区の溝底は111cmの深さにある。

第三章 ま と め

平出遺跡は過去に於て何回かにわたって発掘調査が実施され縄文時代から平安時代にかけての大集落址であることが判明し、昭和27年には国史跡に指定された。指定範囲は東西1 km、南北300～400mにわたる15haである。今回の発掘調査地区は、その東部地区にあたり、長田の水田地帯のすぐ北側に位置する。長田を潤す淡川に臨んで緩かに南面する。

調査区域周辺は、西側には昭和20年代にI、J、K、M各トレンチが、東側にはS、Tトレンチがそれぞれ入れられ、幾つかの遺構が検出されている。そこで従来の調査結果を参考にしながら今回の調査地区の遺跡内における位置、検出遺構の意義について考えてみたい。

今回の調査では、縄文時代の遺構・遺物は全くなく、該期の空白地域ということが判明した。西方のI、Jトレンチではホ、ヘ、ト、チ、リ各住居址が検出され、また今年度同時進行で調査が実施された5トレンチでも多くの住居址が確認され、縄文時代中期前半の集落が展開していたことが明らかになっている。遺構・遺物の検出状況から考えておそらく、今回の調査地区は集落の周縁部にあたっていたものと考えられる。

古墳時代ではある程度の密度をもって住居址が検出されたが、従来の調査では遺構・遺物の分布は希薄で、むしろ平安時代の集落地区と考えられていた。しかし、昭和54年度の東部地域での遺構確認調査によって検出された51号址や今回の調査結果からすれば、この東部地域でもかなり濃密に古墳時代集落が展開していたと推定できる。平出遺跡の古墳時代集落を論じた桐原健氏によれば、古墳時代の平出では、平出の泉、淡川に囲まれた1～3のグループと長田北のグループ、床尾周辺グループにそれぞれ分かれ、平出古墳群に対応するものは1～3グループと床尾グループで、長田北グループは長田前古墳、大塚古墳に対応するものとされ、別グループの集落と考えられている。今回の調査結果でも、遺跡中央部に集落の空白地帯があり、東・西地域に住居址が集中することが確認されていることから桐原氏の想定した集落構成を裏付けることになった。東部地域での古墳時代集落の在り方を論ずる上で貴重な資料となるものといえる。

このように今回の調査は、従来の未調査地域を対象としたため、検出された遺構・遺物は僅少ではあったが、東部地域の遺跡の在り方を把握するうえで注目される成果となった。



调查区全景 (1~9区)



调查区全景 (10~19区)



調査区全景 (20~25区)



H-115号住居址



H-117、118号住居址



H-116号住居址



H-118号住居址出土遺物



溝状遺構

史跡 平 出 遺 跡

昭和61年度基管かんがい排水事業中平地区
埋藏文化財包蔵地発掘調査報告書

昭和62年3月20日 印刷

昭和62年3月25日 発行

発行者 長野県塩尻市教育委員会

印刷所 機 高 砂 印 刷 所

